南木武教

序

和漢（日本と支那）の兵の道にある人は、古今にその名は多いけれども、日本においては、河内判官・楠木正成ただ一人だけが、その真髄を得たのであった。知ある人は天下国家をも均しく治め、仁ある人は爵位や俸禄をも辞し、勇ある人は白刃をも蹈（ふ）む。知・仁・勇の三つのものを具備して進退存亡を心得、その正しきを失わなかった人物、それが正成先生なのであった。嗚呼、時の不祥によって、建武三年五月二十五日、兵庫湊川にて戦死された。その年四十三であられた。この書を記し、幼い息子・正行（まさつら）に与え、その身が無き後までの道義を伝えた。正行もまた、義戦に死す。この書は既に消失しているはずであったが、幸いにして世に残っていた。そうではあっても麤学の士（深く学んでいない者）が、みだりにこれを取り入れれば、過ちが多くなるであろうことを恐れる。それ故に愚和（＝私の至らぬ注釈）を加えて一助とする。なお又、先生の意に違わないことを恐懼するものである。延宝九辛酉五月日、安藤氏掃雲軒謹んで書す。

南木武経目録

巻第一
正成先生自序、付和義　軍元立将の法、付和　司天行　妙術　円謀　労謀四つの大事　密謀　乱相
巻第二
和義敵を亡す毒薬の事　二相大悟、付十六攻法の事　自悟の法事
伝法の起、付僧問答先生大悟の事、付和
巻第三
三妙無尽の法、付軍備の事　八陣和書本起図説　教戦の法　間地の定法
四武の陣委説分合の秘術　地形転変委説の図　火戦の法
巻第四
船軍の事　夜討の軍法事　篝の事　竜陣三段の事　十死一生合戦の事　気変応和の事
自悟工夫の法
巻第五
神道正授　因神の起　次第神起　神に念ずるの法軍陣に専とする八種の秘術の事　変相の薬方、付真言
敵を調伏する秘術の事　日取方角天気を知る秘術の事
五神通の事
一、道通　寛治の法、一和自在を得、敵を滅ぼし兵を得る　理智開明の事
二、実通　真空明鏡　狐疑決了して安心を得、諸魔降伏の奇特を現す、並びに和義地獄極楽を眼前に見、天狗化物生霊死霊等狐愚人を迷わすを悟って、奇怪嫌疑無く大悟安心の事
三、心通の大人長将　一息を以って百万の兵を得、一息を以って百万の敵を亡ぼす事
四、神通は大智を得、百度死し百度生まれて、無量の奇特を現わす事
五、相通　明らかに三世を知り、二相を悟って災難を得ず、千里を隔てて敵陣を知る事
自修之法　自悟之法　付和義天下豊饒万民安楽を令する智謀の事
正成系図伝

南木武教　巻第一（現代口語訳）

軍教序

そもそも、兵法を学ぶ方法は、心性を悟り諸民を親愛するのを上とし、計謀によって学ぶのを中とし、戦術を貪り習うのを下とする。それゆえに、太古の昔から善く兵を治めるには、その将軍自身に先ず徳義が備わり、才知が万人に秀で、勇能が千人に先立つことである。これにより、士卒や民衆がよく親しみ、諸兵が和を以て一致団結し、謀が神に通じ、戦術も奇妙を尽すのである。これを将の三徳と名付ける。古の聖人が云うところの、智仁勇がこれである。そうは云えども、この徳は、また天に比して顕れるべきものではない。聖人と比較してはならない。ただ、自分に相応するだけの仁を施し、その心に有らざることを覚って正しい智となし、邪（よこしま）な行為を避けて正義を守れ。三徳について聖人や賢者と比較し、書かれた文字の崇高さから、自分は到底およばない、などと必ずしも消極的になるべきではない。昔と比較することは、全く無意味である。ただ、その時において敵対する立場の将士と比較し、己をかえりみて、我が徳が、その時点で人々に超越することを求めよ。我が徳が、人々に超越しているならば、この時代の聖人・賢者として認められるのである。将軍に徳が有るときは、敵の兵も必ず我が兵となり、敵の民衆もまた我が民衆となる。将軍に智が有るときは、敵の謀（はかりごと）も我が謀となし、敵の利益もまた、我が利益となる。将軍に勇能が有るときは、敵の威厳も我が威厳となり、敵の能力も我が能力となる。ましてや、国城・地形・用具・兵糧においては、云うまでもない。

およそ、この三徳を以って、この世のあらゆることを明らかに察しながら相手の謀に乗じて、かえってこれを覆す。これを名付けて上将（優れた将軍）の軍法という。中くらいの将軍は、自分自身では徳を積まず、その功績を求め、よく相手の謀を察し、その計略をあざむき、こちらの謀を多くして敵を殺そうとするだけで、敵を生かすことを知らない。十回勝ったとしても、未だかつて太平の世が訪れたことがない。これが中の将軍の方法である。下将は、みだりに戦いを好んで利を争い、士や民を使うのに怒りを以ってし、人を随えるには専ら殺罰を用い、己の勢を頼みにして敵の智謀を悟らず、進むべきではないのに進み、退くべきではないのに退き、作戦の術を自ら考えず人に聴き、常に珍しい武具や奇抜な行為だけを好み、危ういことを頼みに勝つ事を貪るのは、下将の法である。それゆえに、私が教えるところの兵法は、天の道を本として正しい心を教え、攻め戦の勝負は、まさに天命にあるのだと悟らせる。あらゆる合戦において、愚将と良将とが国を争い、または領地を守るとき、士卒はどちらに服従しようとするか。必ずや自ら親愛する将軍に随って、絶対に愚将に随うことはない。それゆえに、兵法を学ぶ方法も、下を覚って中に付き、中を覚って上を学び、より良いものに随わねばならないのである。

たとえば、古の聖王は、全く利を求める心がなかった。しかしながら、自らその徳を積んで仁義を専らにし、死したる人の罪を赦し、愁うる人を救い、人を苦難から解放し、人を危急から救う。それ故に人々は皆敬って、終には天下を保つ。夏・殷・周の統治が久しく続いたことからこれを知ることができる。つまり、天下は貴方自らが求めて得られるものではない。唯一、己の徳義がその時の諸将に勝っており、その才能がその時の士に秀でて、その威厳がその時の敵に勝つならば、世の中は挙げてその君主が必ず上将軍（軍の最上級司令官）となることを願うのである。それ故に、千里も遠くにある者も自分の意志で、必ずその君主に服従する。このような理由で、時が至れば、終には天下の大主となる。太公（文王・武王の軍師で、姜斉の初代君主）の言葉にも、「天下は、一人の天下にあらず。天下の天下なり」とあるように、私が教える兵法では、私欲を捨て去り、天下の利を恣にしてはならない。凡人というものは、ことごとく利を好むものである。施すときは貪り、奪うときは散じ、愛するときは親しみ、憎むときは退く。これによって人を求めるとき、どうして得難いことがあろうか。国に民が治まり、家に兵が調えられているならば、どうして軍備に愁いごとがあろうか。それゆえに、私の兵法とは、心を正し、身を修め、国を治めて天下を平和にするという大義を本分とし、次に凶徒・賊兵に損害を与えるために、智謀・戦術の妙道を教えるのである。この道を得るのは全く難しくはなく、法を修めるのも難しくない。私は古いことを用いて教えることもせず、比喩を用いて語ることもしない。ただ、自ら心を以って、心を伝え、人を以って人のなす事について教えてきた。これらは、ことごとく当世の人情の風俗に応じ、今の天、今の時、今の国、今の事、今の兵、今の民、今の敵に向かって、直ちに用いて安心でき、直ちに施して成り立ち、直ちに戦って勝つべき兵法である。今の世で奸者（邪悪な者）が流布する軍法などは、戦う事だけを学び、敵を撃滅することを巧みにして、あえて勝負の利がどこにあるかを知らない。

多くの場合、勝つことを好む者は、利を貪るからである。専ら利を貪るとき、人は絶対に親しむことがない。人が親しまなければ、陣は和することがない。和することがなければ、備（そなえ）が必ず乱れる。それゆえに、私の兵法は、先ず自

らの心を明らかにして敵の情を察し、自ら国を正しくして敵国を窺い、五陣を全うして敵陣を破る。それは鏡が明らかであれば、よく万象を照らし、自らの心が明らかであれば、よく敵の心を悟るということである。すべからく両陣の間には、奇正や変化が無窮の源から発するが、愚者にはこれを図り知ることができない。古の優れた将軍は、我が兵を安楽にさせて人の兵を屈服させ、我が威（威厳・威力）を増長しながら人の威を奪い、敵がもしも安楽でいれば、必ずこれを疲労させ、敵が驕っていれば、これをくつがえし、敵が恐れていれば、これを折り、敵が和していれば、これを疑わせる。敵が睦んでいれば、これを引き離し、敵が謀れば、これを転じ、敵が西に備えれば、東で勝利し、東に備えれば、西で勝利し、南北もまたそのようにする。たとえ敵が進んできても、我の利となり、敵が退いても、我の利に乗じられる。これは、その心において、智・徳・義が我に有り、敵に比して勝っているからである。我が本当にこれらを全うするならば、死地に居ても愁えず、陰地に備えても苦しまない。

つまり、兵には常なる形がない。ただ、敵によって転化する。奇怪転変であるから形には一切こだわらない。ただ、こちらの謀を秘密にして、敵に我が攻撃する場所を知らせない。それゆえ敵は疑い恐れて、必ずその守備する場所が多くなる。守備する場所が多いときには、配置される場所の兵は少なくなる。我は優れた謀によって敵を分け、その怠る場所に向かって戦う。それゆえに、我と戦う敵兵は少なく、しかも怠っているので、安易にして危ういことなく勝つことができる。大きな力で小さな力に勝つのは天地の道である。一つの陣がすでに破れたならば、残党は必ず不完全になる。我はその衰え弱っているのに乗じて、時を移さずにその敵を討つ。流れ矢の速さのように、また、大風が発するように、間髪を入れず（敵を討つ）というのが、私の軍法が最も重視して教えるところである。そうは云っても人々の多くは、久しく世間を渡り歩くにつれ利己的で悪賢くなり、智恵は少なく才能にも恵まれず、直に文武の諸道を自ら得ることは難しい。それ故に、その事や行為に至るまで詳しく記し、戦いの道の妙用を伝える次第であるから、これを学び、武門の大功を立ててもらいたい。絶対に奸佞（心が曲がっていて悪賢く、人にこびへつらう）の者に伝えてはならない。

心性を悟るという事（注釈）

解説を付け加える。濂溪先生（周敦頤　しゅうとんい、北宋の儒学者）が云われるには、無極とは太極（混沌たる根元）である。太極の上に無極があるのではない。極まりないことを名づけて太極といい、上天の載（こと）は声もなく臭いもない。万物に形はないけれども、その理はすでに具わっている。これを人心に比すれば、未発の中である。太極が動いて陽（分化発動する働き）を生ずる。動くことが極まって静になる。静にして陰（統一含蓄する働き）を生ず。静なることが極まってまた動く。一動一静、互いにその根となる。陰を分け、陽を分けて両儀が立つ。これを人心に比して云うならば、一息の出入りが陰陽である。出る息は陽、入る息は陰である。屈伸、更々何れを本とし、何れを末とするか。陰陽に端なく、出入に時なし。陰一つ陽一つを分けて、これを両儀という。両儀にもとの形はない。両儀は太極である。太極は無極である。陰と陽が変合して、水・木・金・土を生ずる。乾・元・亨・利・貞の五方が具わる。東・西・南・北・中の五気が順に動いて四時（四季）が行われる。これを五行と言うけれども、要するに一陰陽である。陰陽は一太極であり、太極はもと無極である。無極の理が変じて両儀となし、両儀が変じて五行となる。（各々其の性質は常に必ず一になる。これが無極というものの本質（真）である。）二気（陰陽）五行（水火木金土）の精（エネルギー）が微妙に配合して形を作る（凝）。

乾（けん、いぬい）道は男を成し、坤（こん、ひつじさる）道は女を成す。この二気が交わり感じて万物を化生（成）していく。その万物が生々し、変化していくことは窮まりがない。これらは皆、無妄（嘘がない、誠）にしてあらゆる理が具わっている。なんと偉大なことであろうか、易斯それ至れるかな。あらゆる生物が色々変化してきた中でも、人間というものだけがその最も秀れたものを得ているのである。天地は父母であって、人はその子である。また、天のごとく非常に霊妙である。その秀麗な形を生んで形の中に神（精神の深奥）が知を発し、五性（水火木金土）が感動する（感に動く）。（ここに善悪というものが分かれ、あらゆる人間活動（万事）が出てくる。）聖人（＝最も秀麗にして神知を発した優れた人）は、この万物生成化育の道を悟り、天の理を受けて正しいことは何かを定める。天にあっては乾・元・亨・利・貞、人にあっては仁・義・礼・智・信である。（人間としていかに生くべきか（人極）は静（含蓄・潜在）を主とする。）ゆえに聖人は天地とその徳を合わせ、日月とその明を合わせ、四時（四季＝自然の道）とその秩序を合わせ、鬼（創造の破壊作用）神（生命の進化助長作用）とその吉凶を合致させる。（君子これを修めて吉、小人これに悖（もと）りて凶）ゆえに、天地の道を陰陽といい、人の道を仁義という。このように、天地人は一つである。（又、始めをたずねて終わりに返ることによって死生を知ると言う。）易（＝陰陽二つの元素の対立と統合により、森羅万象の変化法則を説く古代支那の哲学と

宇宙観の集大成）こそは、ここに至れるものである。世の中を利し、多くの人を安らかにしようという志を仁という。時として道理を貫くことを義といい、貴びて敬するのを礼といい、これらを知ることを智といい、この四つのものを性のままに貫くものを信といい、（仁・義・礼・智の）四徳を一つに貫くのが信である。たとえば四徳は、四文の銭である。これらを刺し貫くのが信である。性のままに安んじて行く、これが聖人である。至らなければ、過ちがある。その過ちは言葉と行動には見れなくとも、意思が発することにおいて過つ。復してこれを執る（過ちを正してくり返さない）のが、賢い人物である。賢さには大と小がある。孟子・顔淵・程子、これらは皆「大賢」である。復してこれを執る。程子が云うには、顔子は一息にして復す。呼吸一息の間、出る息に過ち、入る息に改める。その次は二息・三息。その次は、時間をかけ、日を重ねて復するに遠いといえども、言行に過つことがなければ賢いのである。その次は物の数にも入らないような、世間の愚かな小人である。聖人は復を離れる、すなわち心の欲するところに従っていても、矩（のり）を超えることがない。今の世の気随（自分の思いのままに振る舞う）者に似たところがある。しかし、気随者は道理を貫かない。聖人は気随に似ているけれども、理と気が一体であるがゆえに、言行が皆、法に適合している。顔子は思うことにより得て、勉めてそれを貫く。勉めなければ礼をつくすことが出来ない。大賢と小賢が分かれるのは、ほとんどは思うことによるのではなく、さほど勉めなくてもよいのが大賢、一生懸命に勉めなければならないのが小賢であると知らねばならない。

顔子の徳行を孔子と比較すると、孔子が五十歳の時と同じである。孔子三十にして立つとは、性の善なることを知って忠信に従ったことである。志が強固であれば、小善にも進み、小悪をも用いないのである。学んだ知識の及ぶだけは、勉めることで行動に移すことができる。毛髪ほどにも悪に順じることはない。それゆえに、「立つ」というのである。そうは云えども、学んだ知識が少なければ、智において少々の惑いがあるに違いない。五十にして天命を知るというのは、易に通じるようになることである。この時でも、未だ道を行うのに従容として、とはならない。思うことにより得て、勉めてこれを貫くといった程度である。顔子をこの時に比すべきである。七十にして思わずして得、勉めずして貫く。これが大徳というものである。これを貴び、天と比する。程子が云うには、顔子は形に顕れるまでの過ちはしない。また、顔子の過つところも、呼吸一息意発の過ちである。これは伊川先生の発明である。後の人がこの意に達することなく、夫子と顔子とが相去ることを庶幾（こいねがう、切に願い望む）したのであろうと心得、その実際の意義を知らないためであるから、ここに記す。顔子が未だに聖人になれないのは、勉めなければできないからである。そうであれば、意発に過ちがあり、それが表面化していないだけである。そうであっても、その志の正しさが強固であれば、一つでも不善があれば速やかに察知できる。それゆえに善が止まるところに復する学問の道は他にない。その不善を知るとき、速やかに改めて善にしたがうのみであるといえよう。今の世の学者も、その善に従いたいものだと欲しているけれどもできない。なぜならば、その本を正さず、心中が不純だからである。意発に過ちがあっても自覚していない。それゆえに、言行に顕れるまでに過つのである。

孟子が云うには、学問の道は他にはない。ただ、その放心を求めるのみといえよう。放心を敬わないのは、万悪の本である。また、このようにも云う。過ちをおかして改めないのを過ちといい、また、過ちをおかしたならば改めるのを憚（はばか）ってはならない。顔子は過ちを再びはしない。その意味するところは皆同じである。つまり、意発の過ちである。このように知っていても存養（＝本心や本性を養い育てること）がなく、放心を敬わなければ意発の過ちを自覚できない。言葉と行動とで過ってから悔い改めたところで何の徳があろうか。学問の道は他にない。夜昼には間断がなければならず、存養（＝本心や本性を養い育てること）はこれを敬う慎みがなければならない。ただ、平常の心得は座禅により悟りを得ることに勝るものはない。心を動かさないこと、これが性定である。定とは、動静が皆定といえども、人情というものは動き易く、静かにしているのが難しいものである。それゆえに、静を本とし、動を末にする。いわゆる止まることを知って定まることがある、そうして静となる。静なる所は未だ安からず。静かなる地を起きれば安し。道を知る人でなければ、誰がよくこれを悟ることができようか。安きところを例えて云えば明鏡のようなものである。明鏡といえば、形があるのに似ていながら、何の意もない。しかも、万物がよく映る。是非の分別が明らかであれば、これをよく慮るというのである。私するところの分別ではない。天慮至善（天が慮って善に至る）である。ゆえに、よく事物を得るのである。このようにして得ることを後にし、止まることを先とする。止まるのは止静である。放心することを慎まねばならない。ある客が私（＝掃雲軒、以下同じ）にこのように質問した。「善悪と是非とは何を以って区分するのであろうか。」そこでこう云った。「問うことはよろしい。初学の者は、先ず是非にかかわらず、善悪を知るべきことが大切である。」

善というのは、性に従うことの道である。是非の沙汰ではない。善の中に是非があり、悪の中に是非がある。性に従う道といえども、法に適合していなければ、善中の非である。それゆえ、中庸の書でもこう云っている。天命性道これまでは、

赤子も同じ道を修めるのを教えといい、その教えとするところは、仁義礼智の四徳である。天命よりも性に従うのは、道であるといえども理に適わなければ、また道ではない。人の道は、四徳を以って性とする。そうは云っても、知が及ばないがため、知らずして過つのは、天の為す災いである。自分で知りながら過つのは、自分が為すところの災いである。自分で為す罪は悪である。天の為す罪は非である。これを悪というべきではない。ある人が私に質問してこう云った。「お釈迦様の教えに、善を思わず、悪を思わず、とある。この語は、性に従うという天道を云っているのではないのか。」それに対してこう云った。「そのとおり。」父母から未だ生まれていない以前、これを本空という。体が顕れた今に道が成るという理、これである。これに通じるのを識心見性（心を識り、性を見る）という。識心見性して下学（まず手近なところ、初歩的な事柄から学ぶこと）しなければ、法（＝秩序、掟、法則、慣習）に適合しない。法は理である。正しい理に適合しないままでの上達は非である。孔子の云うところの狂者である。下学は正法である。正法とは、天有の四徳である仁義礼智の性により行動するところの孝弟忠信である。下学して孝弟忠信の業（＝行い、振る舞い）を知り、その理にしたがわず、無妄に（誠をもって）行う、これを下学して上達するというのである。下学なくして上達することは、内外が相連続しない。上達に似て、上達ではなく、妄（道理がわからず、筋道がなく、でたらめ）である。聖を知る人でなくしては、誰がよくこの意に通じることができようか。質問して云うには、「お釈迦様が仏性とするところは、善を思わず、悪を思わず、である。孟子は性善という。どういうことであろうか。」答えていう。「孟子の性善、孔子の言葉に可もなく不可もない。これである。仏教の善を思わず、悪を思わずとは、孟子がいう善である。言葉は別であるが意味するところは同じである。」

序に智仁勇と書いた事（注釈）

解説を付け加える。知とは、良知を云う。学んで知り伝え聞く知識ではない。良知は性である。孟子が云うところの、口の味わい、目の色、耳の声、鼻の臭い、四肢の安佚（あんいつ）、この五つは天理の自然性である。赤子にもこれがある。皆以って学ばずして知る人情の伝えではなくして、天から与えられた知である。仏教ではこれを名付けて教外別伝という。知とはこれである。そうであっても君子は性であるとは云わず、命を執る。教えを受けて貴ぶことを「命を受ける」と云う。小人が性のままであれば気随の狂者である。道を修めることを教えという。道を修めるとは、師の命を受けて仁・義・礼・智の徳を知り、孝・弟・忠・信の道を行い、これを学んで是を知る。仁を学ぶと言うことである。良智を以って仁を学び、明をわきまえているとしても、言と動とを兼ね備えて篤く行わなければ不忠である。徒善（気持ちばかりで実行の伴わない善）である。また小人である。強固に勉めて行動し、その功を成す。これを名付けて勇といい、知・仁・勇三つのものは、一つでも欠けては一つも叶わない。正成が記し置いたところの三つのものは、その用をいうものであって、その体を述べたものではない。世の人が惑うのではないかと恐れてここに記しておく。

孟子は云う。右に書いてある五つのものは性である。君子は性と云わず、命を執る。命は学知の仁である。仁・義・礼・知・信・五常を分けていうときは、仁の父子、義の君臣、礼の賓主、智の賢者、聖の天道、この五つのものは命である。そうであっても、性がある。君子は命であるとは言わない。かく言う意味は、この五つのものは、命をうけ学んでこれを行うといえども、未だ至らなければ勉めて行い、性のままに至るようになることを願うがゆえに命と言わず、性であるという。右のこの十のものを知るときは、道を知るのに近い。これらは皆、孟子の発明である。知・仁・勇の三つのもの、どれを優先すべきであろうか。孔子はこれを仁と云い、太公は勇と云い、孫子はこれを知と云う。どれもが正しい。どれを先にするか。どれを後にするか。我が朝の神道においても、太神宮は知を以って体とされ、春日は仁を体とされている。八幡は勇を体とされている。三社は本は一つ、天照大神一神に帰されるのである。一神が二社をお産みになられ、九万の霊神がお分かれになられた。大なるや神道、無極にして太極である。恐れ多いがゆえに、これについては略す。

軍元立将の法

いかなる場合でも、敵を撃滅して世を統治する方法は、軍備無くして叶うことはない。寒さを凌ぎたければ、自宅や衣服を調え、炎熱を凌ぎたければ、地隙や谷間の涼しさを求める。敵を撃滅し、世を統治したければ、賢士良将を求めよ。もしも、軍備無くしてその難を逃れようとするならば心身は疲れ、諸民は苦しんでその利を得られない。私が伝えるところの方法は、先ず七つの能力の賢将を求めることで、変化応戦自在にして、百回戦っても利を得られないことは一度も無いだろう。貴方は必ずここに記しておくことを守って、七人の良将を求めよ。まず、人を求めるには、心の徳を求めて位や形で選んではならない。万軍の勝敗とは、将の良し悪しによるものである。

司天行　　戦わずして敵を亡ぼす

戦わずして敵を亡ぼすには、先ず七人の将を得なければならない。良将を得る方法がある。善人を用いるときは、名将を得ることになる。一つには道徳の士、二つには智謀の士、三つには耳目の士、四つには心強く弁舌の士、五つには勇力正直の士、六つには用具巧達の士、七つには算勘検見の士である。この七人を求めることを要とすべきである。この七つを用いることについて左に詳述する。

第一、道徳の士を以って自国の政治を正し、日々に自ら諫めごとを請うようにせよ。一日でも諫めごとを請わなければ、味方は千騎の消耗となって、敵には千騎の利がある。それゆえ、ほんの一瞬でも無益な日を送ってはならない。一事の非を知って正すときは、万事に有益である。味方が万事に有益なときは、敵国は万種の労がある。道徳の士を以って国を治めよ。これが戦わずして敵を撃滅するという秘術である。

第二、智謀の士を以って自国の益を考慮し、他国の労を察すべし。自国の益とは、一つには名将を得、二つには士卒を得、三つには食糧を多くする。四つには用具を得る。五つには多国に味方を得る。この方法は敵国との近境に進出して謀士道士を以って謀るべし。こうした五つの利得が味方にあるときは、必ず敵に五つの損がある。これが戦わずして敵を亡国にするという術である。

第三、耳目の士を以って敵国の政治を察すべし。これは秘伝であるが、三人を遣わさねばならない。遣わして何も知らないように振る舞え。敵国が正しいときは、慎んで自国の政治を正し、日々善人を用い、自ら降(くだ)って民衆の歎きを救い、徳を厚くして時を待つべし。好みや欲が起きたならば、五神通を開いて見よ。伝あり。自国の政治が敵国より勝っているときは、敵を亡国にする術に長ずるものと知るべし。また、敵国の政治が乱れて民衆が歎いているようであれば、自国の民衆を憐れみ、速やかに謀士を以って相手の気相を悟って敵の内部を乱すようにせよ。謀るには相通の法を以ってせよ。伝あり。味方の費（ついえ＝費用、経費）により敵に送る。その費を為すべき者は、一つには普請（ふしん＝建築工事、土木工事）を好むこと、二つには美女、三つには猿楽、四つには犬鷹、五つには酒宴、六つには偏道、伝あり。七つには讒者（人をおとしいれようとして、事実に反する悪口を言う者）である。ただし、このような者はその国中に制法をなし、用いてはならない。上に愛する事がないならば、自国を去る者である。このような者が敵国へ行く時は、兵を派遣して攻めるに及ばない。これが戦わずして敵を亡国にする術である。

第四、心強く弁舌の士を以って謀士に付けて敵国に対する謀を策すべし。敵の意志を覆したければ、心強く弁舌の士を使うべきである。敵情を察してこれを謀れ。この時の謀は大事であるから、円謀の智をもって成さねばならない。一人の敵を抱き込めば、味方十騎とおなじ利がある。これによって、数万人の敵に当たることもある。これまた、戦わずして勝つべき法である。

第五、勇力正直の士は、計謀の役人、人質などで出すのに益がある。また、敵中に入って急いで敵情を知るのに有益である。

第六、用具巧達の士は自国の用具を長じ、敵国の用具を妨げるのに利がある。

第七、算勘検見の士には、先ず敵領内の状況、並びに人数・兵糧の分限を察し、道のりを考え、敵国の絵図を作成させるべし。

右の七人の将を以ってするときは、剛敵といえども、或いは一年、或いは二、三年のうちに、必ず戦わずして亡びることになる。疑わしき謀を知ることは、謀源の法を以って知るべし。これは、円謀の内にある。

妙　術

全ての智謀は、心を明らかにすることが肝要である。また、信頼から智が起こることが肝要である。なぜかといえば、人には本来、智があるのだけれども、妄念により暗く閉ざされているからである。それゆえに心を明らかにして、信を他の腹中に置いて（信頼関係の中で）謀を起こさねばならない。伝え受けることによれば、静かな場所に座して心を臍の下に置き、呼吸するにも踵から上に通るかのようにしなければならない。真言に言うところの「帰命頂礼八幡大菩薩」と返す返す念じ、そうして謀を縁に応じて成すべし。このように工夫することで、或いは百日、或いは半年にして道を得ることに成就することになる。円謀を以って知るべし。ただし、五神通を極めて悟れ。日月を経るには及ばない。理智を開悟さえすれば、一見して万謀を知るものである。

円　謀

円謀とは、例えば敵に囲まれて籠城するとき、寄手（攻城側）の一方の大将が回忠（かえりちゅう＝寝返り）をして共に籠城することを請うのに対し、この敵が偽か実かを知らない時の返答で、偽実どちらでも味方の利とするやり方がある。このように言うのである。

「回忠のことは、誠に殊勝な心掛けである。籠城の中にあって、この忠は非常にありがたいことだ。その恩義に報いるため、我も心底を残さず密事をお知らせいたそうと思う。実は、寄手の内に数多くの回忠の人がいる。その人々に陣中で叛旗をひるがえしてもらうのに、日時を久しくすべきではない。そうであれば、近いうちに城中から合図のしるしを挙げよう。その時には、こちらも後詰めをいたそう。必ず城中から討って出るであろう。」

この回忠が敵の謀であれば、何らかの変化が生じる理由となる。回忠が本当であるときは、なお、そのようになるだろう。また、もしも回忠が敵の偽りであって、同士討ちを始めたならば、城中からその状況をよく見て、あわてて出て行ってはならない。たとえ回忠の者が死んだとしても、寄手の内が死ぬのであって、城中の者は死なない。これこそが敵を亡ぼす謀である。これを円謀という。

籠城の大将が降伏したいと申すのであれば、偽か実かを問わず城を出させよ。城から出てきたならば、人質を取れ。その上で降伏した大将とその士卒とを一つの場所に置いてはならない。西国の人であれば東国へ、東国の人であれば西国へ、領地を与えて遣わすのである。降伏した士卒については、合戦になれば、士は加勢をお願いしたいと云って留めておき、しかるべき者の配下に入れて（合戦する）一方の強いほうに付かせるのである。また、近国の武士にも先んじて内通しておくことで、降伏した者たちを守らねばならない。その上、天下が治まるときには、いかにも恩を与えて置くようにせよ。これまた、偽実ともに利がある方法である。

労謀四つの大事

城を囲み、攻める時、この四つの方法を以ってせよ。必ず有利になる。

城を囲むときは、敵国の地形を察し、城中から見える所に夜な夜な篝火を焚け。或いは森、里を占領して、城の三方に（篝火を）焚け。森や里が無い平野であれば、人形を作って立て、その後ろに篝火を焚いて人を五～七人付けて、時々人形と篝火の間に人を通すようにせよ。昼は近隣の山中や森・里の影から煙を立て、時々旗印を立たせて、城の周辺の寄手とその印を合わせるなどにより、見せつけよ。敵兵の気を屈する謀である。大将は智があって謀と知っていても、城中の妻子や下人らは、寄手が山野に満ちているのだと思って、皆気を屈するものである。下々が気を屈するときは、上は聖人ではないのであるから、共に気を労するに違いない。これが敵兵の気を屈する方法である。

城中に謀反人を求める法

これは、縁を用いて謀らねばならない。例えば城中の大将には、数多ある臣下の中に、心中不和の人が必ずいる。我慢の多い者の親類を求めよ。これにより、城中に申し遣わすべきことは、「この度、貴殿に何としてもお知らせしたいことがあり、こうして参りましたが、寄手が山野に満ちていて大変厳しい状況にありますれば、その意志はさらに強まりました。寄手の様子を見るに城中に籠っていられるのもそう長くはないものと思われます。その上、城中から回忠の者も多いようだとの風聞があることを御心得あるべきでしょう。この度貴殿へ申し入れたいことの詳細は、城中の〇〇殿が貴殿のことを主君へ讒言して、既にその御身に危害が及んでいるはずのところ、思いもよらず敵が来て城を囲んだことから、その用意を中止したのであります。城中のある者がこの事は義に反することであると主君に異見を唱えたところ、彼を殺すべしとされたがため、その者が城を落ち延びて、この事を我らに知らせたのです。そのことを是非とも心に留めて、万が一にもこの度は運よく助かったとしても、時を移さず（城を）落ちられるべきでしょう。この事を申し上げるため参りました。」と申し遣わすのである。必ずや謀反人が出てくるであろう。たとい謀反をおこさずとも、城中を分断する利益がある。これへの返答によって智謀の効果を見極める。

城中の兵ども疑いを生ずる事

これは、城を囲むのに地形によって、四つ、あるいは三つの方向から攻め寄せる場合に、内々に城中において疑われるようにさせたい者が堅めた手を攻めずに、それ以外の手計を攻めよ。一度ならず再々にわたりこのようにすれば、城中の兵は（この者を）疑うようになる。この時、城中を察し、疑うべき者の名による計策を文に書いて、他の手に遣わすように

せよ。これにより、必ず内部を分断することができる。この文書が城内において大将の耳に入ったものと思うとき、それ以外の手は攻めずに、疑うべき者の手計を空攻めに少々攻めるのである。これが内部を疑わせる方法である。これによって謀を設けよ。

城中思い合わざる事

これは、城中でも威厳ある大将の家中の者たちでも、少々嫉みを抱いているかと思われるようであれば、寄手の大将から勇達の者を使いに遣わし、城中のその人（大将）に対面して申すべきことがあると云わせて、太刀かたなを納めて対面を請い、大将が出てきて対面すれば、「ひそかに申し上げたいことがあります」と近くに寄って、たいしたこともない事をつぶやき、話の途中で言を止めて、何か急用があるように不意に帰るのである。その時、城中の大将はきっと大いに笑って、たいした事もないことを申しに来たものだ、と云うであろう。そう云ったとしても、城中の士卒は疑念をもつに違いない。城中に疑念があることを聞いたならば、この大将へ寄手の総大将から人を遣わせよ。「誰々にこの程人を遣わしたのは、たいした事ではありませんでした。貴方はより好みがあるので、一時の音信に人を遣わしたものであります。何ごとも疑いをもたれやすいものだから、さらにあってはなりません」と誓言を以って申し遣わす時には、なお疑うものである。

籠城のとき、謀を以って兵糧、薪などを貯えることがある。これは時によって謀をもたらすため、前もって定め難いといえども、往事について記しておくので、今後の智謀は、これを以って考察せよ。私が赤坂の籠城で兵糧に難儀していたとき、橋本の八郎に人夫を二十人付けて、普恩寺と赤橋の手元へ、回忠の者を装って出し、また十人の弓が上手でない者を、安間の三郎を大将にして、赤橋の身辺に使える者の下へ商人に扮して出して置いた。赤橋は悦に入って、城中には兵糧がどれ程あるのかと問うのに対し、橋本が申すには、「城中には兵糧が沢山あります。今の人数であれば来年一年は籠っていても、食の尽きることはないでしょう。むしろ正成が難儀しているのは、薪であります。常に智慮をめぐらしながらも、夜に受け取ることが難しいのであります。一両日以前にも楢原の在家へ（薪の）調達に人を遣わして、予定通りに調達して、城中に忍び入ったのです。もしも、この人夫に似せて薪を背負って入り、兵糧蔵の前に積み置き、夜中に火をかけて焼いてしまえば、兵は皆騒動して城を落ち、あるいは自害をせざる得なくなりましょう。たとい城を落とすことはなくとも、兵糧蔵は焼くべきです。そうすれば、城は安易に落ちるでしょう。某が召し連れた者たちに城中の案内をしている間、これらを先に立て、貴殿の手の者どもを後に置き、城中へ入りまして、このようにいたしましょう。某は降人として城を出たことを大そう遺恨に思っています。皆、見知っておりますので、これにお任せいただきたいと申し上げたならば、赤橋は悦んで橋本に計らせることにした。その間、この調達に出していた十人の商人たちは、袋に米を入れて薪の内に入れ、夜に橋本の人夫二十人、赤橋の人夫三十人に持たせて、赤橋の人夫大将を伴って、橋本も門のきわまで見送るようにして、城の中に入る。私が兼ねて謀っていたことであるから、人夫を一人ひとり召し捕らえて、赤橋の人夫大将を則誅し、橋本も偽って縄にかけ、誅するかのように見せかけて、赤橋の人夫のうち一人を取り逃がしたかのようにして城の外に出した。これにより、寄手は謀とは知らないままであったという。このようなことを察して、籠城するにせよ、城を囲むにせよ、油断してはならないのである。

密　謀

天眼通を得て剛敵を敗り、大円通を得て国家を治す

天下を治めて敵を滅することは、全て戦によって得るべきものではない。常に柔を以って敵を攻めよ。柔とは心中の信を柔とする。およそ人心は柔にして空である。しかもあらゆる事象に通じて無色無形にして、その効用は剛にして大である。石を砕き、金をとろかす。ことごとくこの空心の用にして、柔を以って剛を制す。たとえば鉄を以って石を砕けば、石が破損するときは鉄も破損する。心はこれが柔なるがため、破損することがない。ゆえに、剛敵に対して力を以って攻めてはならない。必ず柔を以って攻めなければならない。剛敵を亡ぼすことは安易である。柔を用いる方法を左に記述する。天下がもしも公家の御治世になったとしても、あるいは官軍が内部で分裂することがあって、武家の世になったとしても、貴方の智を現してはならない。時の大樹（＝権力者）の好みに随って、日月を送れ。心中に邪佞をさしはさまず、信を以って忠を尽せ。もしも、時の風流によって乱舞遊会の驕りの道があったとしても、外にはこれを愛するがごとくにし、内にはこれに惑わぬようにせよ。このような時に臨んでは、天下の武士の気性を悟れ。世に順興が始まるときは、三番・四番にこれをつとめよ。世は公家の御造作、あるいは天役にあたるときは、世のなみを考えて、四番・五番にこれをつとめ

よ。時をそむいて役にあたれば、何ごとかあるものだと悟れ。敵愾心をなくせ。疎遠であっても、俄かに和を請うて交わろうとしてくるならば、謀と悟れ。常に私的な好楽を禁じて禄を費やさないようにせよ。天下の執権には必ず礼をつくせ。第一に彼の気持ちを察せよ。このような者は威厳に乗っかっているだけなので、己に従う者に対する惑いがある。時の沙汰を彼が教えを受けたのと同じようにせよ。外面的には近づいて、内心は近づいてはならない。彼が好むところを以って心を傾けよ。謀るには二相の法を以ってなせ。およそ日本の者は、上下ともに利欲が深い。それゆえに財を以ってするときは、必ず傾け易い。天下に十悪長じて逆敵の起こること相急なるときは、病を作って良医を用いよ。一切の行法を心中につとめて顕してはならない。心中を正しくして天地の時を待て。剛敵も終には必ず亡びることになる。これが柔を用いることの一つめである。

民の年貢を納めることは世のなみを用いよ。もしも、取立てがきびしくて民が疲労していれば、糧を民に貸すと号して与え、民を安堵させよ。外面は世の法を用いて、内には恵む謀が有るべきである。城中で美女を愛することがあってはならない。美女があるときは、敵にこれを求めさせよ。朋友とは、心情を悟って交わりをなせ。礼を厚くして好みに随ってなびかせよ。常に無二の心となしておけ。己の優れているところを人に隠すように謀れ。外は愚なりといえども、内を明らかにせよ。偽って人を嘲弄してはならない。他家の長臣に便りを求め、心情を察して思いを施せ。これまた、柔を用いることの二つ目である。

賤しい者であれば貴くして色と財とを与えて謀れ。貧者であれば懇(ねんご)ろにせよ。小利の物であっても、これに施せ。讒者があれば彼を落とせ。心情を察して好意に随ってくつがえせ。また、自ら正しきに毀(こわ)れる者は、己の威厳を好むからである。これを察して彼を覆(くつがえ)させよ。親しみがあって恩を厚く施してきた者であっても、心が変わりやすい者であれば早く捨てよ。こうした者は、遺恨をもたらせなければ高ぶるからである。貴方に随う者には早く禄を与えて恩を知らせよ。自己に財を得るときは、早く分けて諸兵に与えよ。天下の者がおしなべて威厳を好むのであれば、これに随え。かえって相乗効果が大きい。天下挙げて財を好むとも、これを好んではならない。これまた、柔を用いることの三つ目である。

右の三種の柔法は、敵を亡ぼし、家を斉(ととの)え、天下を治めるための妙術である。

乱相

大樹（＝権力者）の喜びが積って十分であるときは、必ず歎きがあると知らねばならない。（権力者に）子が数多であり、母が多いのは乱の始まりと悟るべきである。威が甚だしければ、長臣は必ず遠ざかるものと知っておけ。そうは云えども、内心を見せないようにして外面を謀れ。これまた、乱の謀と悟れ。城を広大にして常に御殿を造り、諸国に苦役が頻繁であるのは乱相である。日々の糧が少なく、国中で人が集まることが多ければ、必ず敗れるものと知っておけ。時の長臣が不和であり、国に財を集めるのが忠であると思い、互いに威を争うことがあるのは、三年のうちに乱がある相だと悟れ。諸国を疑って疑心を以って、国々の士を労するならば、天下は飢餓になると悟れ。城中に美女が多く、味を好み、大酒を好むのは、大樹（＝権力者）の病があるにちがいないと悟れ。大将の心が短気にして罰が厳しいのは、一年のうちに乱が起きると知れ。天下に訴えが多く、あるいは刑人が多いのは、お上の怠りや偽りがあると悟れ。

右の十ヶ条がともに備わるときは、天下の乱が三ヶ月中に起きる。そのようなときは、自国を全うせよ。この十悪は他人の非であって、自己はこれを禁ぜよ。常に謀をもってせよ。いかなるときも、利益を貪って君臣の礼を乱してはならない。天下を保つことは、人情の妄曲（道理に暗く、筋を曲げること）に任せてはならない。仁徳に厚くあるがゆえに、このように智を得て己を全うするときは、国が治まることも「たなごころ（＝手の内側）」の中に（手中に）成るものである。召し使う武士が敵の威に傾き、疑わしい事があるときは、四種の根気を見て、彼の心を転ぜよ。愛があって眼の中が青く、身が脂ぎっている者には、美女を与えよ。気分も軽やかで笑みを好み、眼は空を見る者には、吉事を作ってこれにより謀れ。必ず心を転ずる利がある。敵国とは戦を必要としないようにせよ。早く近国から綱をおろせ。敵の兵を殺すのは実の軍ではない。敵を削って味方を長ぜよ。（＝敵を寝返らせて味方を増やせ。）敵が堅固であれば自国を守れ。敵が弱ければ速やかにこれを敗れ。取り得たものは、手放してはならない。

兵を統制するには殺罰を以って為してはならない。己の威厳を高めるような謀を専らになせ。威厳が高ければ制する方法は自在である。殺罰を以ってこれを求めようとすれば、兵は皆落ちて失うことになり、陣も自ら敗れる。常に士卒に恩恵を与え、兵たちに和を以て一致団結させるには、信頼を本とせよ。大将が安きに居れば兵は和を以て一致団結することがない。食事をし、衣を脱いで座ったり横になったりすることも、必ず兵を先にせよ。信頼が行き届いて後、叛く兵があれ

ば、諸兵に理を尽してこれを殺せ。何よりも恩賞を与えることを重視せよ。ほんのわずかな忠誠でも褒め上げられるようであれば、随わない者はいない。

敵を敗るには備えの動くほうに向かえ。身動きせずに静粛である兵とは皆、和を以て一致団結している兆候である。ただし、敵が偽って動くことも有るので、足元を見て攻め懸かれ。こうすれば敵を敗れないということはない。

理によって謀を企てる時は、絶対に他者に談じてはならない。先ず自ら委細を書にして、繰り返しこれを誦見せよ。その時、自ら敵の心となり、その謀を察して見よ。敵として悟ることがあるならば改めよ。早々に言葉に出してはならない。言説すれば必ず漏れるものである。事が既に決して（その謀を）用いるときは、時日を延ばしてはならない。これもまた、友智を得る秘術である。

天下の民が苦しむ時には、自国の民を安んぜよ。人の憂いを助けるときは、必ず幸福が日々に長ずる。幸福が長ずるときは、国も自ら治まる。国が治まるときは、敵を覆滅することも容易である。それゆえに、貴方は道を失うことがあってはならない。

ここで解説を付け加える。賊は外から到らず、先ずその内を治める。一つには備え、二つには城、三つには陣、四つには行軍、五つには宿営である。天子は天下を以って備とし、諸侯は国を以って備とし、大夫は家を以って備とし、一人はその身が備である。城・陣・行軍・宿営の四つは、備の略（＝筋道を立てた計画）である。備が乱れるならば、城々が乱れ、陣々が乱れ、行軍が極まり、また、新たに備えることになる。

備の事（注釈）

解説を付け加える。備は平生（常日ごろからのもの）である。その順序を云うならば、将は先ず学問を好んで智を求めなければならない。学ぶものにも是非がある。天理の綱（いとすじ）を正し、聖賢の跡を追い、言行を弁えよ。書を数多く見ようとする必要は無い。文才を事とするな。徳行を事とし、顔子の学ぶところの一善、勉めるところの一息、これをよく弁得し、道に適うようである事を願え。これが物格の智（＝物事の道理や本質を深く追求し理解して、深めた知識や学問）である。その意を欺いてはならない。その意は天性である。疑い惑うことがないようにせよ。今の世の学者、儒者も出家もおしなべて皆「大学」で云うところの意を欺き疑い、是非に結び付けるだけで善なるものと見ることができない。論談は定まらず、妄りに乱読して書を談じる。「意は則ち性なり。性は則ち善なり。悪なし。其意の如くば悪臭を悪（にく）むが如く、好色を好むが如く、皆善なり。」孟子が云うには、その情のごときは善をなすべし。いわゆる善である。不善を為すのは才の罪ではない。小人が閑居して不善を為すのは、性ではなく、心ではなく、意ではなく、情ではなく、才ではない。気稟（きひん：生まれつきもっている気質）の人欲である。勝手気ままの私欲に蔽われ、時として暗いことがあっても、その本体の徳が明らかであれば、悪人であったとしても、その悪を覆い隠し、善のみを挙げて言葉を飾る。これも皆、意において悪はないことを言い表している。たとえば心は湍水（渦巻いている水）、意は流水、「意」は心の発なりと書く。意に悪は無い。善である。そうであれば、大学の書のように、その意を欺いてはならない。それゆえに、君子は外に求めず、己を正すのである。その意のようであれば、我が肺や肝臓を見るようなものである。少しも利益を損するところがない。十の目が見るところ、十の手が指すところ、これらは皆、厳正であろうか。学問の道は他にはない。その不善を知るときは、速やかに改めて善に従うのみであると云えよう。その不善を知るのは意である。意は誠である。誠は天性である。ゆえに、我が心を欺かず、疑わず、いやしめず、貴び敬って、その意に従わねばならない。

意は誠である。後の人は達せずしてこのように云っている。聖は生まれながらにして知る。学んで至るようなものではない、と。そして、己の心意を欺き毀（そし）り、疑い賤しめ、我が身に具わる明徳仏性を求めず。外に向かって道を求め、博聞強記文辞を以って巧妙に振る舞い、珍語珍説を栄華にし、徳なき威を求め、世の愚人を騙し、道があるように事を似せて世を惑わし、人を苦しめ政を破る。天下の大罪人であるけれども、（他に）聡明叡智の威があるわけでもなければ、益々驕りを極め、実の賢知をかすめ覆っているのである。

なによりも学問は、己の明徳仏性を知るためであるから、博学ではないと云えども、外には求めないのである。己の意を疑わず、欺かず、この一善を得て失ってはならない。ただ、意を誠にして欺かず、その意に従うときは、発言と行動とに過ちがない。もしまた、気質にひかれて過ちがあったとしても、存養（＝本心や本性を養い育てること）を敬えば、意が早くに過ちであると知らせるため、速やかに改めて悔いが残らない。内心に省みてやましいことがなければ、心は広く体も胖（ゆた）かである。それゆえに、君子は必ずその意を誠にする。意は賤しいものではない。貴いものである。疑ってはならない。初学の者、先ず書の数を広く読もうとするよりも、大学の三綱領八条目、中庸の天命性道の教え、次に未発の

中、次に意発の中を順次に読んで理解せよ。万書を読むとも、その根本は乱れない。これを違えてはならない。人々は具足の（＝不足なく十分に備わっている）天性を知る。これが学問の始めである。仏教もまた同じである。己心則弥陀、唯心則浄土。外に向かって求めてはならない。我が意というものは皆、善なのである。

天上天下唯我独尊。この言葉は釈迦一人の自讃ではない。人々が具足の仏性であるからには、このように云うのは当然のことなのである。疑ってはならない。

ある僧が私（掃雲軒）に挨拶してこのように云ってきた。意に善悪がある。仏説では皆このように云う。どうして善のみだと云うことができようか。私は答えて云った。僧の言うことは違うのではないか。何を以って悪があろうか。僧は云う。大学の書に意を誠にするとあるのだから、誠でない意もあるだろう。私は答えて云う。意は誠である。誠は意である。僧が云う。悪にきざす意がある。善にきざす意がある。私が云う。不義にきざす意と云うべきではない。気である。不義にきざしていても知らずに為すのは、天の罪である。我の為す罪ではない。この時は不義であっても悪と云うべきではない。悪ともに善である。知らずして為す罪は天の罪。天の罪は悪ではない。非というべきものである。是にあたらないだけである。是非はともに善である。どうして悪と云えようか。僧は云う。心は本にして善である。意は末である。悪がある。私は云う。心は誠に湍水（渦巻いている水）のようである。意は心に発するのである。湍水も水流も水である。本末皆善である。孟子が云うには、その情のごときは皆善である。不善をなすのは、才の罪ではないということだ。この言葉を証と執るならば、意は情よりも本である。情は末である。情でさえも悪は無い。どうして意に悪があろうか。僧は云う。情は本である。意は末である。私は答えて云う。僧の言うことは矛盾している。そうではない。大学の書で曾子が云っているではないか。その意を誠にすとは自ら欺くことなかれ。悪臭を悪むがごとく、好色を好むがごとし、と。この言葉を僧は知っておられるか。僧は云う。知っている。私は云う。そのようなときは、見聞覚知は意である。喜怒哀楽は情である。僧は喜怒があって後に見聞するのか。見聞の後に喜怒があるのか。世の中では皆、人情の常は、見聞の後に七情が発する。見聞が無い前から七情がある者など未だかつて聞いたことがない。僧の言うことは正しくないと云えば、僧は答えずに他の者に、口の賢き者には返答しないのがよい、と云って何も言わなくなった。

このような世僧俗儒のなま学者は、空言のみを覚えて、眼のいらざる世愚も皆このようなものである。ある禅師が私に挨拶して云うには、仏が伝える教えは意を用いない。意は心を惑わすものである。それなのになぜ善であると云うのか。世間では皆、儒者も仏門もそのようには言わない。その我慢（強い自己意識から起こす慢心）を止めたまえ。こう云ったのである。私は云う。禅師は碧岩を読まれていないのか。禅宗第一の書と聞いているのだが。第九の巻にこうある。維摩詰（ゆいまきつ）が文殊師利（もんじゅしゅり）に問う。菩薩が不二の法門（＝互いに相反する二つのものが、実は別々に存在するものではないということ）に入るとは何をいうのか。文殊が云う。私が思うに、一切のあらゆる現象は言葉で説明できない。言うこともなく、説くこともなく、示すこともなく、識ることも無い。諸々の問答を離れたところにある。これを不二の法門に入るという。そこで文殊が維摩詰に問う。我々は既に各々自説を述べた。次はあなたが説きなさい。菩薩が不二法門に入るとは、何をいうのであろうか。維摩詰は黙ったまま言葉がない。禅師はこの説話を覚えておられないのか。意というものは善である。悪ではない。この説話は非であろうか。しかも、その一人は文殊、今一人は維摩である。愚者の問答であるはずがない。これを我慢と云えようか。仏説でも、優れた人は意は善であると論じている。どうして儒者のみであろうか。孟子の性善も、孔子の誠意も皆一つである。維摩が黙ったままであるその意は、意ではない。教えて云えば、文殊の意となんらの違いもない。言うに及ばずと答えられたという意である。孔子は云っている。参（しん＝曾子の名）よ、私の道は一つの道理を以って貫く。曾子は、唯（はい）と云う。一つの道理とは信である。忠恕は信を以って貫く。唯は維摩が黙ったままでいたのと同じことである。中は一念未発、忠は意である。心のままに言動があるのは恕（＝自分を思うのと同じように相手を思いやること、思いやり）である。二つに分ければ内と外、何も思わなければ一つである。性のままである。思わず、勉めず、心の欲するところに従ったとしても、矩を踰（こ）えることはない。外法に違わないということもない。下学上達がこれである。これは聖人の事であり、賢者はそうではない。法を学んで勉めて行う。下学が有って上達がない。先ず士は賢いことを願い、そこに及んではまた、終に至るであろう事を願うのだと云えよう。

私が讃岐の国にいた時、ある士が私に告げたことには、世上の学者は皆、意に善悪があると云うが、どうして一人だけ意は善であると云うのか。世に逆らっているのでは。私は答えて云う。私は孟子を師とする。もしも孟子がはっきりと「意は善である」と言っていれば、誰が私を非とするであろうか。先生が未だ言わないがために、世人も貴方のように云うのである。孟子がもしも性悪と定めれば、各々性悪と云うのであろうか。孟子よりも前に性善の言は出ていない。初めて性善を云ったのである。大学に述べている意を悪として読んだならば、孔子・曾子の道は皆、乱れてしまう。前後が相連続

しなくなるのである。孔子・孟子の道が乱れれば、何を以って我らのような盲人が杖とするのであろうか。これを悲しむが故に、世の儒者に悖って論ずる。孔子・孟子がどうして私を憎むことがあろうか。世の愚者に憎まれるのもいやではあるが、天に憎まれるのはもっといやなことである、と云えば、なおまた情張り者と云って、あれこれと誹謗して悪態をつく。悲しいものである。あちらに行けば、あちらで憎まれ、こちらに行けば、こちらで謗られる。私もまた千里の能まではないとしても、百里までには及ぶであろう。食べることが十分でなければ力が不足する。云いたいと思いながら云い及ぼさない。これは何事にも云えるのだが、私もまた少しは賢いのだが、姦臣に蔽われてこのようになるのだ。佞姦の士は、邪知が多くてよく人を謗る。自分に親しければ悪中の是を挙げて誉め、自分に疎であれば善中の非を挙げて謗る。国の主である者は、よくよく考慮しなければならない。姦人が人を謗るのにも深い心得があるものだ。自分が憎いと思えば、先ず謗らずに誉める。その誉めることは主人もよく知っている小さなことを挙げて数々誉める。誉めることは多いけれども、小さなことであるから集めても少ない。また、主人は心底から嫌うような悪事をでっち上げて、ただ一つだけ謗る。また、自分に親しければ、主人が心の底では好んで喜ぶような小さな悪事を数々挙げて謗る。また、善事を作り上げて、ただ一つ誉める。主人が賢ければ、一人が云うことだけを間違いないとすべきではないと心得、旁ら近くの者や末端の横目付（監視役、将士の行動の監察や論功行賞などをつかさどった役職）にまで詳しく問う。皆の言うことが同じであるならば、ここにおいて主人は是非を判定する。姦臣が上にいると、心を合わせ情を同じくして、諸司諸役人が悉く言を同じくして主に訴える。それゆえに、邪心ある者の群れが取り囲んで賢者を覆い、上の心が下に通じない。下の情も上に通じないのである。上中下が一つに和した備がない。これは皆、中の者の口が曲がっているからである。それゆえ、古より明君は、上下遠からず、民の訴え、民の諫め、直に聞こし召そうと謀るのである。

今の世も、上藹（じょうかつ＝地位・身分の高い人）は下の情を知らない。私は身分が低いので少年の時から国々を経めぐり、今の世の武士の風俗をよく知っているがために、このことを申すのである。太公望が文王に云ったことには、君主が世俗の誉めるところの者を以って賢者とし、世俗の謗るところの者を以って不肖とすれば、党が多い者は進み、党が少ない者は退く。実に当然の事である。世俗の毀誉は、実情とは合わないものであるぞ。人の主たる者は油断してはならない。賢者は必ず党が少なく、不肖者は必ず党が多い。孔子もそのように言っている。おしなべて人から好かれている者も不可である。おしなべて人から憎まれている者も不可である。国人で善なる者には誉められ、不全なる者には憎まれようとすればよいのである。明君はこのことを忽せにせず、人の賢愚をよく悟り、道徳の士を以って左右の大臣大将として、二人の良将となる人を択び、中の手の四武とする。四武の将もまた人を択び、八陣の将を求める。八人がまた十六の将を択び、三十二将に変じ、六十四手の将が備わる。ゆえに、上の情が下に通じることは天が万物を生ずるかのようになり、上下一和の備となる。この備は常にある。近習二番中四番、外様八番のように常なる番組を定め、末端の諸役人六十四の心得、足軽中間下部に至るまで、下五人組を定め、五々二十五人の小頭、五十人の頭、もろ手百人の頭、五百人の頭、二千五百人の頭、万有二千五百人頭を、士から以下庶人に至るまでそれぞれ定め、軍を教えるのに両臣四人に教え、四人が八人に伝え、八々六十四手の頭に伝え、金鞍旗貝一切の合図の約束を伝え、常にこれを間断なく、一ヶ月に一度は頭を集めてこれを習わす。治世に乱を忘れないという武の備はこのようなものである。

武があって文がなければ義理を知らないことになるので、道理を学ばせ、仁義礼智の四徳をしらせ、孝弟忠信の業を勉め、善に進め、悪を退け、是非を弁えさせ、その徳有る者と無い者とをよく選別し、賞罰を正し、万民を安楽ならしめることを願い、我が身の欲を離れ、驕りを止め、年貢を少なく、諸役を軽く、民が飢えと寒さに苦しんでいるようであれば、我が身に飢えと寒さが有るかのように悲しみ、民が楽しんでいるのを見ては、自分が楽しんでいるように喜び、民と好悪を同じくすれば、万民はその君主を戴くことを日月のように貴び、その君主に親しみ奉ることは、父母のように思うのである。これを賢徳の君と云う。このように国を治めるとき、誰が敢えて敵対しようか。常の備が正しいというのは、これを云うのであると太公望は文王に語った。この外細々とした教えがある。賢徳の君がいれば、大公を師として、その道を学ばせ給うのであれば、今の世もまた文王と同じである。文王はこの教えを貴び、勉め行ったがために、周の世は永く治まり、子孫に伝わる時、万歳を超え、国は万里を隔てているといえども、天理の良法は符節を合するようなものである。今の世もまた文王がいれば、日本とは古い国であるといえども、その命これまた新たになる。楠木正成の備の巻がこれである。備えが正しいとき、城陣行営の四つのものは云うに足らずである。

建武三年五月日　　正五位河内守橘朝臣　　正成在判

和曰（解説）、敵を亡ぼす毒薬の事

神通神変を為すということは、人情の及ぶところではない。神ではなく、仏でもないならば、通じて達することも叶わないように、愚昧な者は惑うものである。しかし、智者は惑わない。神道・儒教 仏教の三つの教えは皆、天から降ってきたのでも、地から生じたのでもない。これらは皆、人が説いたところの教えである。そうは云っても、聖人が天地を体した功用（＝実際に役に立つはたらき）であれば、人の業と云うべきではなく、これまた天道である。

昔から権力者の伝記には、優れた将軍の不思議を説くものが数多い。これには理がある。奇特（＝非常に珍しく、不思議なこと）に似て奇特ではない。神仏の二つの道には、奇怪の妙用を説くことが多いけれども、本意ではない。それでも、世の中を利し、民を安からしめようとの愁いからなされるのであれば、誠にありがたい信実である。天竺（古代インド）と日本は、震旦（古代支那）に比すれば、異端の国である。ゆえに、人の風俗は利に根ざし過ぎ、惑いて通じない。怪奇なことを語って威さなければ懲りないのである。中和の（偏りのない）道は素直であるけれども、国により、所により、時により相容れないことも多い。孔子は怪力乱神を語らないのが常であった。聖徳太子が云うには、強いてこの句に依るのであれば、我が国の罪人である。彼は、これはあの国の儒教のみで、我が国はこれと同じではない、と云う。怪は神の功用を説くのでないならば、神徳を無にする。神は我が国の徳体を説かないのであれば、斉元を無にする。孔子は乱を語らないとは云うものの、子路にこう云っている。事に臨んでは恐れ、謀を好んで為そうとする者ばかりであれば、乱世には偽も認められるのである。軍書に「兵は不祥の器なり。天道これを悪む。」とあるが、やむを得ずして用いるのであれば認められる。これまた、天道である。世の儒者が云うには、釈迦の地獄極楽の説は、全て下層の人の為に、この怖ろしい令を設け、善を進め、悪を退ける為である。至誠が天地を貫けども、進歩向上できない人も多い。どうして偽の教えを立てて、人が進歩向上することがあろうか、と沙汰している。これまた、我が国の罪人である。神徳を無にするものであって、仁政ではない。ただ、学者は時と所と国の風俗と、この三つを悟り、権力を動かして国を治めるのを上智とする。生まれ持っての才能に、また学習を兼ね備えなければ聖智ではない。孔子・孟子・釈迦・聖徳太子がその地を替えたならば、皆がなるほどそうだ、と知るであろう。

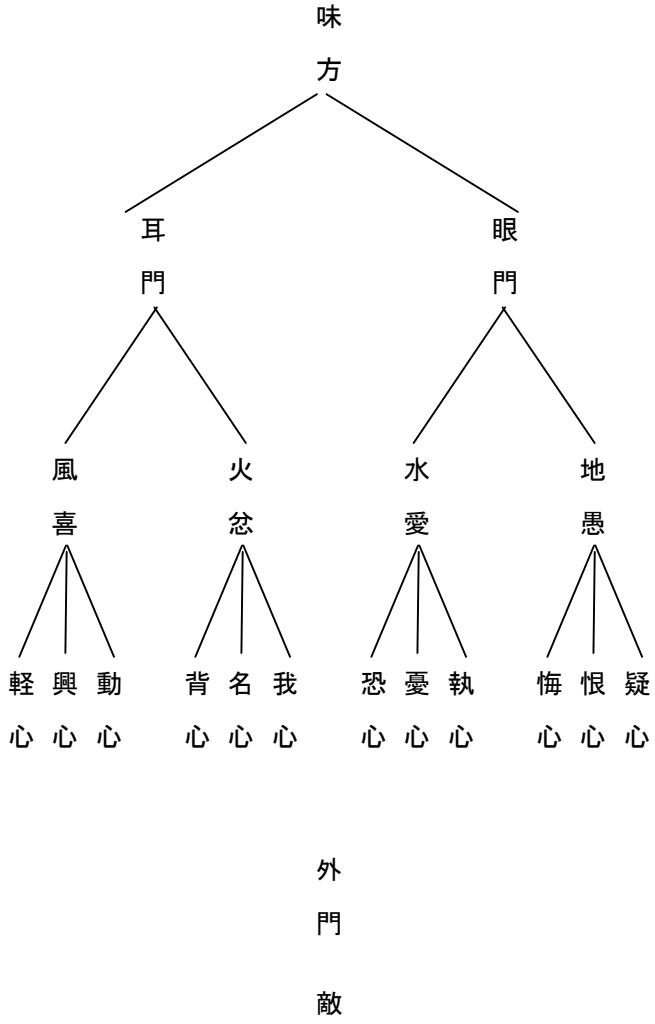
六韜は太公の書ではない。後に人事を好む者が名を借りて作ったのである。大いなる偽であると、世の儒者の多くが語っている。これこそ大いなる空言（そらごと）である。大聖孔子が事に望まれるならば、必ず太公に与されることであろう。謀は夫子（＝長者・賢者・先生など）も太公には及ぶことはない。また、兵具は人を殺そうとする為のようでありながら、実は人を殺さない為のものである。謀は賤しいようであるけれど、世を利して民を安んじる為ならば、仁の道である。この書も謀について言うことが多いが、これらは皆、忠孝の為なのである。どうして私的なものであろうか。道を知る人でなければ、誰がよく正成の心意を悟ることができようか。時は不幸にして愚君に縁を結んで早世した。人としてこれを貴ぶべきであろうか。惜しむべきであろうか。

二相大悟法

およそ敵を攻めるのに、この二門から攻めずに戦うことは不可である。

私の軍法の妙道は、これを以って一切の神変を得たのである。尊氏は耳門から攻め入るのが有利であった。建武二年正月二十九日の合戦で、尊氏を攻め落とすことができたのは、律僧（＝戒律を守る僧、律宗の僧）を作って京都に出し、大将たちが討たれたのだと云わせ、風聞の音声を以って、尊氏の耳門から心中に魔兵を入れ、京都に引き入れて戦に理を得たのである。凡人には、常に耳から好欲をなす者が多い。あるいは、琴・太鼓、詠物や美音を好む者には、耳門から魔兵を入れて攻めよ。耳門から攻めるのに八つの情がある。一つには短期にして忿（ふん＝怒り）が多い者、二つには我慢（＝強い自己意識から起こす慢心）の心が多い者、三つには名利の心が多い者、四つには恩があっても背き、敵対心が強い者、この四つは火により起こる。五つには喜びを好む心が多い者、六つには顛倒（てんど＝うろたえ、動転する）の心が多い者、七つには戯遊興を好む心が多い者、八つには万事に心軽く、疎略の心が多い者、この四つは風により起こる。この情を察して耳門から攻め入る。

およそ眼門から好欲を起こす者は、見物を好み、美色に迷うがゆえに、この道より攻めよ。新田義貞は眼に迷いが深かった。彼は常に美女を好んだ事がこれである。義貞には私を討とうと謀をした。私はこの者の情を察し、それゆえ、終に討



たれなかった。常に威を顕して見せ、彼の気を呑んだのである。このように、情を察して気を挫くため、眼門から攻めるのに八種の情がある。一つには愚痴が深い者、二つに疑いの深い者、三つには恨みの深い者、四つには後悔の深い者、右の四つは地が大きいことにより生ずる。五つには愛着の心が多い者、六つには執念を果たせなかった者、七つには憂いが深い者、八つには万に恐れの多い者、右の四つは水の大きいことにより生ずる。この情を察して眼門から攻め入れ。

十六の攻法

愚敵が欲心深く、財宝を愛するならば、常に利得を進めて、禄を以ってこれを手懐けよ。殊に今の世の武士は、久しく兵乱の費えに労して、皆禄を好まない者はいない。何れも財を以ってこれを傾けよ。このような者に逢って、貴方は心中無欲にして、外面は欲があるかのようにせよ。

疑い深い者には、音信を怠ってはならない。己を全うして人を疑わせよ。時が至れば、その便りを得よ。第一には、この情は謀に便利なことが多い。出陣に向かって一戦にして撃滅することが容易である。それゆえ、軍は疑いを決するのを肝要とせよ。

恨み深い者は、心を込めた贈り物を喜ぶ。己を全うして敵が結びつかないようにせよ。時を得れば、敵を以って敵を亡ぼせ。手紙によって讒者を以って謀を企てよ。後悔深い者であれば、昔の非をとがめるな。必ず彼が悔いることが有るにちがいない。その情報を活用して今を覆せ。これまた、愚痴心が深いからである。彼に応じてこれを労せよ。

愛着の深い者は必ず色欲が深い。美女を以ってこれを謀れ。心を傾けることも容易いことである。味方はこれを好くかのようにして、敵を近づけて心を解くようにせよ。敵は和してくるだろう。自らが少しでも迷えば、却って敵に謀られるのである。もしも敵が察して謀るときは、これに乗じて相手を転ぜよ。執念深い者には、心に親疎の絶えざる縁を求めてこれを傾けよ。親しき縁により謀るのであれば、女色を設けてなせ。疎遠により謀るのであれば、男子の縁を設けて謀れ。

憂い深き者は、心弱い者である。時を察して味方が有利なときは、剛を以って急に攻めよ。

恐れる者は謹みが多い。味方を全うして国を治めよ。敵が事を正しくして世を謹むときは、味方の知を現してはならない。国民を労せずして自ら愚かに行動せよ。私は常に鬚(ひげ)を長くして帯をゆるくしていたのを、世の人は大鬚の狸顔(たぬきづら)と嘲笑した。この狸は、却って人を取ること度を得たのであった。ゆえに、恐れる敵であれば、威を仰いで悦ばせよ。心中の驕りが出て内から乱れるものである。

忿が深い者は、名利を好む。いかにも随ってこれを覆せ。

我心の多い者は、論を好む。気に随って彼をなびくようにせよ。いかなる時も絶対に危ういことを好んではならない。そのようなときは、その行為を防ぐことがあってはならない。彼を見て驚かされることがないようにせよ。自己の利益を察して、敵を労せよ。元弘三年の春、飯盛山の賊徒の大将、佐々目の僧正は、大力の士を好んだ。私はこれを悟って、藤江の平八を勘当と号して出した。敵はこれを招いた。私は彼に謀を約束して、内から敵を破った。これが好みに随い、情に

任せる方法である。
名利深い者は、常に言葉に偽りが多い。名を挙げて気をとけ。敵が隣国と結びついたならば、讒者を以ってこれを裂け。
名利深い将であれば、速やかに讒言により覆せ。
背心深い者は、謀反を発することが容易い。彼には早く敵を与えて共に亡ぼせ。自己に仇が有るとしても、これを許せ。
この者が自ら家を全うして時を得て、無道を立て、法を破れば、退いて義兵を挙げよ。諸兵は常に憤りがあるから、与力して心を合わせよ。
喜び深い者は、難儀や憂いを嫌う者である。吉事や福を謀って心を傾けよ。
動心深い者は、常に臆病である。風聞で難儀をうたわせて兵の気を乱せ。戦時は不意の法（奇襲戦法）によって攻めよ。
興心深い者は、楽を好む。常に珍しい興行を愛して安易なことを喜ぶ。これに付け込んで虚に乗ずるようにせよ。
軽心深い者は、過ちが多い。突然のやり方でこの心を揺り動かせ。兵の気は必ず強弱に偏りがある。強いときは、弱を以って労せよ。弱いときは強を以って攻めよ。情に随って謀を企てよ。
右の十六の心は、敵を攻めるための通り道、敵を亡ぼすための毒薬である。これを以って攻めるならば、百回戦うと云えども、勝利を得られないということはない。

自悟の法　（略）

伝法の記　（略）

二相大悟、付十六制法の事（注釈）　（略）

正成先生大悟の事（注釈）　（略）

正成道を以って軍に勝つ謀有りや、僧至善を以って兵とせよと謂れし事　（略）

南木武教　巻第三　（略）

南木武教　巻第四　（略）

南木武教　巻第五

神道正授巻　（略）

因神起　（略）

次第神起

（前略）
右のように神を用いること、正しい心を真の神として万の神をすすめ奉るのである。常に神を敬って礼を乱してはならない。一切の謀は、神の力を借りなければならない。
解説を付け加える。常に天の時を突いて（又は、破って）用いなければ、事の節目に臨んで謀は成功しない。また、天の時なきにもあらず（＝必ずしも無いとは限らない）とも云われる。神道の書、家々の伝、その数は多い。正成がこの書で記し置くところは、その千万の中から一つを挙げて、身を修め、家を斉（ととの）え、国を治め、天下を平らかにするための一助とするものである。軍（いくさ）に用いるその理だけを、小智短才の愚人が悪しき心で修得するならば、神などは存

在しない物であると欺き、邪道に入るであろう。そして神の罰を蒙るのである。天地の中にある者は皆、鬼神の功用である。天道は無色無形にしてあらゆる物事を生み出す。人の為すところもまた、神の徳である。孟子は「天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず」と云っている。その重要なものを優先し、軽いものを次にする。これは皆、神のなす所業である。愚者は、その軽重を量ることがなく、妄りに天の時を頼んで人の和を無にする。嗚呼、哀れなことだ。

五神通の事

道通　寛治の法、一和自在を得、敵を滅ぼし兵を得る　理智開明の事

寛治法とは、大丈夫（＝立派な男子、ますらお）が永く泰平であることを心として、常に政道を糺す（＝理非を明らかにし、罪過の有無を追及する）のを肝要とすることである。第一に、己を全うして諸国の地を疑ってはならない。第二に、人を用いるには善人を用いるようにせよ。善人は道を乱さず、人を憐れんで泰平を致す。善人を用いて日々に諫めを請わねばならない。その中根は国を治る内、これを心とせよ。下根は敵を亡ぼす内、これを心とせよ。止まるべき所の地なり。国を治めずということはない。敵を亡ぼさないことはない。軍法に云うところの、善人を用いて、用いていないようにする。これを行いながら、行っていないようにする。これが兵法の術である。

一和して自在を得るとは、兵が和して一致団結できなければ、備を自由自在に変化させることもできないということである。このように和して一致団結させることは、何よりも優先すべきことである。あるいは、太平の為に敵を亡ぼそうとすることに皆は心を向けるように、善人を用いるのである。

もしも、心に邪欲が起これば、泰平を亡きものにする敵の所へ心を帰任させよ。真言で云う所の、南無三宝と念じて理の方へ帰任すべし、である。そうすれば、政治や法も乱れず、それゆえに兵の気も一和するのである。一和するときは、百回攻めて百回退くとも、変化することは大いに自在となる。

敵を滅し兵を得るとは、善人を得れば、兵は日々強くなる。味方の兵が強くなれば、敵の兵は滅することになる。

理智開悟とは、以上の三つの事を全て用いることができれば、百回戦ったとしても味方が勝利する。ここでいう理と云うのは、空寂（＝宇宙のすべての事物は実体がなく、その本性は空であるということ）を云うのではなく、現存する実体の上にいて、敵が少なく味方が多ければ、これは味方の勝利であり、敵が不和であって味方が一和しているならば、これは味方に有利である。敵が偽っても和睦を請うならば、味方に有利であり、敵が偽っても小勢を出すのも味方に有利である。この時は勝ちてから撃つのではない。勝つ時は勝て、討つ時は討つのである。

これが理を開悟するということの大意である。

実通　真空明鏡　狐疑決了して安心を得、諸魔降伏の奇特を現す

真空明鏡について述べる。天地の間に明なるものは理である。理は光明である。それゆえ、隠しても不義を行えば、終には恥辱を顕す。隠しても善を行えば、終には善をあらわす。このように、人の心が物を見て、音を聞き、味を知ることは、天の明々たるようなものである。これを以って心は元真空明鏡と云うのである。ゆえに通を知る。

諸魔降伏奇特を現ずとは、大昔から今日までのあらゆる奇特神変（＝人知ではははかり知ることのできない、不可思議な変異）は、全て人の成すところであり、悉く方便である。異形（＝普通とは違う怪しい姿形）には妙用（＝不思議な作用。非常にすぐれた働き）が有って、山を現わし、水を流し、天に昇り、地に入ると云うことも、理を云って神変があるのだ。そうではあっても、理によって謀を廻らせれば、これは大神通である。ある時、私（正成）の家に一人の山伏が来て、私には不吉の難があるにちがいないと告げる。その次に正成の生歳年月日時ないし身中の疵、足下の紋、手の裏の筋までのことを述べたが、一つとして違わない。家人上下皆、不思議な思いを抱く。

その時、私は若年ではあったが理に迷わなかった。この男の魔化を現わし滅しようとして、近隣の民を一人召し寄せて、彼のことを問うち、山伏が云うには、一日三人のことを申して、二人のことは堅き制法にして申さずとのことなので、私は山伏をその場に止め置き、庭に炭火を起こして云った。ただ今、お前が偽っていることを白状しなければ、この場で焼き殺すぞ。この男は終にその謀詐を白状し、私が久しく召し使っている者と出入りの針術の者があったが、彼ら三人による謀であるとのことを縷々述べた。その時、山伏には代物（商品）三百疋（き）を与え、偽って吉野本山別当へ右のことを記した書状とともに山伏を遣わして、別当の所にて密かにこれを殺した。同じく召し使えていた者、針術の者も誅（＝罪

をとがめて殺す）した。これは実通の徳により、魔を滅し神変を破ったものである。
奇特を顕すとは、私がある時、八幡大菩薩を勧請（＝神仏の来臨や神託を祈り願うこと）し奉りていると、近くに召し使っていた童が狂気して様々の不思議なことを述べ、前にある泉水に飛び入ったならば、水の下から沸きかえって熱湯となった。これが奇特であろうか。この時、諸人は随喜した。秘伝にも、「人を用い、具を用いる」とある。なお口伝あり。工夫。
狐疑を決了して安心を得るとは、往昔から無量の不思議を説くと云えども、全く外には存在しない。躰（てい）あるとすれば人でしかない。古人の鬼と云うのは、心のすさまじさを以って云ったのであり、その形を異形としたのである。また、心が妄乱することから、これを異形と見たのである。地獄・天道・穢土・浄土はこの世の外に存在しない。全く天地を離れるものではない。ただ心に依って仏が有る。楞厳経（りょうごんきょう＝大乗仏典の一つ）に諸々の地獄を説き終えてこう述べている。「これにより衆生（生命のあるものすべて、特に人間）が別に作し、別に造るに世界の中に於いて同じ分地に入る、妄想より発生す。本来者るに非ず　云々。」これゆえに、嫌疑を決しなければならない。少しでも嫌疑があれば、名将とは云い難い。嫌疑があれば必ず敵の謀に転ぜられるものである。疑を決する者は、敵の謀を転ずべし。己を全うすれば天理は素直である。狐疑することなければ、心中は快いものである。ゆえに安心を得ることができる。

諸魔降伏の事（注釈）

※目次では、「和義地獄極楽を眼前に見、天狗化物生霊死霊等狐愚人を迷わすを悟って、奇怪嫌疑無く大悟安心の事」とある。

解説を付け加える。諸魔降伏の事は書いてあるとおりである。天地の間にある物は、是非共に全て理がある。この理を知る者は、疑い惑うことがなく、心中が安楽である。愚者は知らないがゆえに疑い惑いて心中安らぐことがない。世の愚人の惑うところの大方は、地獄極楽の沙汰、天狗化物狐の人を惑わす沙汰、生霊死霊幽霊の沙汰、これらは皆、専ら世人の嫌疑するところであろう。世の愚人は云うに足らず。博学の俗儒また和尚上人などと称して大寺の住持、別当など名付けて導師する人、大概この疑あることが数多である。
（中略）
このようなことをも弁え明らかにして、あらゆる物事に疑いが無いことを物に格る（＝物事の道理を理解することで、その本質を究明する）と云うのである。物に格れば智がある。智があれば意に誠がある。ゆえに、私が教えるところの兵法は狐疑を決了し、万法に嫌疑なく、意を誠にするのを先とする。意に誠があれば心は正しい。身が治まり国や天下を平らかにする。これが大人の兵法である。どうして一人に対して勝つことを事とすることがあろうか。粗野であるや、小人の兵法。
伝えて云われることには、味方はこれを知っているために敵の謀に落ちず、敵は愚かにして知らないがゆえに我が謀に落ちる。

心通　大人長将　一息を以って百万の兵を得、一息を以って百万の敵を亡ぼす

大人長将について述べる。人の心は本来は空虚である。風が時々吹くように、来る所は強くなるが、その後は必ず弱くなる。それゆえ、敵が気を発すれば、柔を以って労して、その後を撃て。これが兵法の術である。この念を極めて見るものは、身にあるのではない。本来は空虚である。目前に現れるところの形を以って念を生ずる。形があったとしても、明るくなければ見えない。ゆえに、鏡と光明と眼目と身内とこの四つを合して物を見、物を知るのであり、人体も四大相に因りて意識を生ずるのである。ゆえに、人の一切の見聞覚智は、全て天の極理によるのであって、私個人によるものではない。この見聞覚智するところにおいて苦しむのを以って衆生は凡人と名付ける。この理を知ることにより、大人長将と云うのである。
一息を以って百万の兵を得るとは、どういうことか。人の心は本来は虚であって、物に対して心を生ずる。ゆえに士卒は大将の一言によって勇む。
（以下略）

神通　大智を得、百度死し百度生まれて、無量の奇特を現わす

大智を得るとは、あらゆる物事に疑念なければ心地は自在である。城を構えるには地形を知り、城を攻めるには破ることを知り、合戦に臨んでは勝つことを知り、敵を亡ぼすべきことを知り、国を治めることを知る。これが大智を得ることの徳である。狐疑を決することができなければ、智を生ずることもできない。このような時は、先ず道有る者を見習って疑を決するようにせよ。必ず大智を生ずることになる。

百度死し百度生まれるとは、死なずとも死したかのようにする。全て智を得て変ずる法である。大軍が不意に来て囲まれ、味方に防ぐだけの兵が無く、城中に糧が尽きるようであれば、必死の時である。この時は密かに死人を求めて火葬にして、その身は兵たちに向かって自害する由を申して、お前たちは夜明けに城を開き渡すべしと云って、夜に入って眉毛をそり、髪の毛を焼いて、身に変相の薬を塗り、下人の病があるように扮装して、隠密のうちに落ちるのである。面を隠してはならない。とがめる者があるならば、立ち寄って食を乞うて、浅ましい様態にて落ちるのである。真言の文がある。私が赤坂城を落ちる時、このやり方によって利を得たのである。このような神変は止むを得ないときに至って作為すべきである。利がないと云うことはない。また、大軍に囲まれて百分の一にして二百騎有り、剰（あまつさ）え城中に糧無く、後攻めの便り無く、通路をふさがれたならば、時日を延ばさず柔十死に極みて、竜陣三段の備を以って夜討に撃って出なければならない。一方が不敗と云うことはない。これまた、十死にして十生の神通である。また、戦いに負けた時は大将が自害するかのように装い、首を求めて面の皮をはぎ捨てて落ち行くようにせよ。

変相の法
変相の真言
右何れも前に有り
竜陣三段の備　　備の巻伝授に有り

相通　明らかに三世を知り　二相を悟って災難を得ず、千里を隔てて敵陣を知る事

明らかに三世を知るとはどういうことか。万物の根元は無体にして性がある。この性は不生不滅にして、世界に有っては天性と云う。人はこれを敬って神とする。人の身に有っては心とする。この心たる心、これを仏と為し聖と為す。この心の変屈したのを凡人とする。昔の人が云うには、即心即仏（＝心の本体は仏と異なるものではなく、この心がそのまま仏であるということ）とは、不変にして天が明瞭でるように、世と同じく万法（＝物質的、精神的なすべての存在がもつ真理・法則）を踏み行い、色のように見、音のように聴き、味のように食べ、縁のように親しみ、恩のように事えることである。色のように見て迷い、音のように聴いて苦しみ、味のように食べて執着する。このような事は即心ではない。皆、変心である。ゆえに凡夫とする。この理を明確に理解しなければ、例えば去年の意趣（＝人を恨む気持ち、遺恨）を去年に落着しなければ、今年の意趣である。今年の事を年内に落着させなければ、来年に通じる。ゆえに有道の者は、今日を無事にして三世に通じる縁が無い。これをもって天理に達する人という。三日のことを以って三世を知ることができれば、世を治め、国を保って敵を亡ぼすことにおいて、どうして理に惑うことがあろうか。これが明らかに三世を知るということである。

二相を悟って災難を得ず、とは何か。人の感情が元は一つであるといえども、体を養い育てるには、四つの縁がある。それは、地・水・火・風、この四種の勝劣である。地は人情の愚を増長する。水は人情の愛を増長する。火は人情の忿（怒り）を増長する。風は人情の喜びを増長する。これらにより、人情は、まず第一に四つの異なるものに区分され、さらに無量の気質に分かれる。そうであっても、その大概はこの四つである。愚なる者には、愛ある者を以って謀る。土は水に和する利がある。忿ある者には、喜ある者を以って謀る。風は火を増長する。これは互いに破り、破られるという方法であると云えども、敵は知らず、味方はこれを知ることにより、利がある。ゆえに、愛深い者は色に溺れる。美女を以って謀るべし。愚深い者は欲に溺れる。財禄を以ってすべし。忿多き者は名利に溺れる。讒言を以ってすべし。喜多き者は福に溺れる。利を以ってすべし。これが相を知ることの秘術である。秘伝には、知りてしかも知らざるが如くすべし、とある。災難を得ざる事は、人情を悟って、他から復讐されないことによる。また、復讐されるべき者は、人情を悟って敵が来るに違いないことを知る。

（以下略）

千里を隔てて敵陣を知るとは、敵将の気を知ることが、あたかも目前の明鏡に向かうかのようである、という意味である。

敵の気が善であるならば全うし、不善であるならば乱れる。ここにおいて、二相を悟って彼を謀るのである。馬や物具を敵国へ商人に遣わせよ。敵が軍を起こそうとしていれば、これらを買うことに高いか安いかを厭わない。兵を求めるには、強い者を好む。ここを以って知るべし。敵の好くところを以って謀を企てることは、二相の言伝えを以ってなせ。これが千里にして敵陣を知る秘術である。秘伝には、知りてしかも知らざるが如くすべし、とある。

自修法

兵を用いる事費（ついえ）を忌む　馬を用いる事分によれ　具を用いる事中を用いよ　食は時を衆と同せよ　臥事は後に臥し夙（つと）に起きよ　衣は厚きを忌む　酒は自ら禁めよ

自悟法

長生不死の法　工夫。　恵照大力の法　工夫。　大殺大生の法　工夫。
天動地動の法　工夫。　自在太平の法　工夫。

右五神通の大事は、これを工夫純熟するならば、一切の神通妙用が定まって達せずということが無い。毫毛（＝ほんのわずか）も疑うことがあれば、天地は遥かに隔たれる。信に至って敬いつつ堅持し、失ってはならない。

解説を加える。ある人が私にこのように告げた。この書を悪く心得れば失うことが実に多い。仏説で云うところの、外道天狗の沙汰である。儒家で云えば、智過ちて中和の徳に入るべからず、ということである。世を排し、人を欺く種となるのではないだろうか。私は答えて云う。そのとおり。悪く心得たならば、正成の書に限らない。異国や本朝での古昔からの書は、皆そうである。ただよく心得さえすればよい、と語れば、彼がまた云う。よく読んで心得る人は世に少なく、多くは悪く心得るに違いない。そうであれば外道天狗になってしまうよりは、学ばずに遊歓したほうがよいと思うが、どうであろうか。

私がこたえて云うには、生得の才が無く学習のみがあって、時流をつかめない学者、聖代の事のみを知っているようだけれど、時と所と国の風俗とを弁えない者は、道を学ぶのではなくして世を惑わし、賢愚を知らない。形だけを似せて、善悪を弁えない。ただ是非の沙汰による。彼はこの無学遊歓よりも劣っている。この書においてはそうではない。今の世、今の時に相応の理だけを記している。これゆえに、彼は姦佞を打破し、よく賢に進み、また聖に至るという教えも兼ね備えている。この書を恐れて学ぶことなく遊歓する人は、一生愚昧不肖の凡民である。進んで学ぶのであれば、未だ聖人には至らなくても、愚を離れることにはなる。智が過ぎて外道天狗と云われるほどの学者には、過って仁を知ったという人が多い。勉めて剛であれば、終には中和に至るであろう。薬は病を直せるけれども、毒薬は未だに消えない。灸治は病を癒すことができても、灸瘡はいまだに治せないようなものである。易に云うところの、亢（こう）の言である。進むことを知りて退くことを知らない、存することを知りて亡くなることを知らない。得ることを知りて喪うことを知らない。これらは賢人の過ちである。それは唯一聖人のみであろうか。進退存亡を知りて、その正しきを失わない者、それは唯一聖人のみであろうか。

（以下略）